

《資料紹介》

史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群の採集資料

— 浄楽寺第 37 号古墳と七ツ塚第 11・49 号古墳 —

下江 裕貴・村田 晋

-
- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1 はじめに | 3 七ツ塚第 11・49 号古墳の採集資料 |
| 2 浄楽寺第 37 号古墳の採集資料 | 4 おわりに |
-

【要約】

広島県立歴史民俗資料館が所蔵する浄楽寺・七ツ塚古墳群の採集資料のうち、浄楽寺第 37 号古墳と七ツ塚第 11・49 号古墳に関わるものを図面・写真とともに紹介し、資料の特徴をもとにこれまで不明だった 3 古墳の築造時期を検討した。

1 はじめに

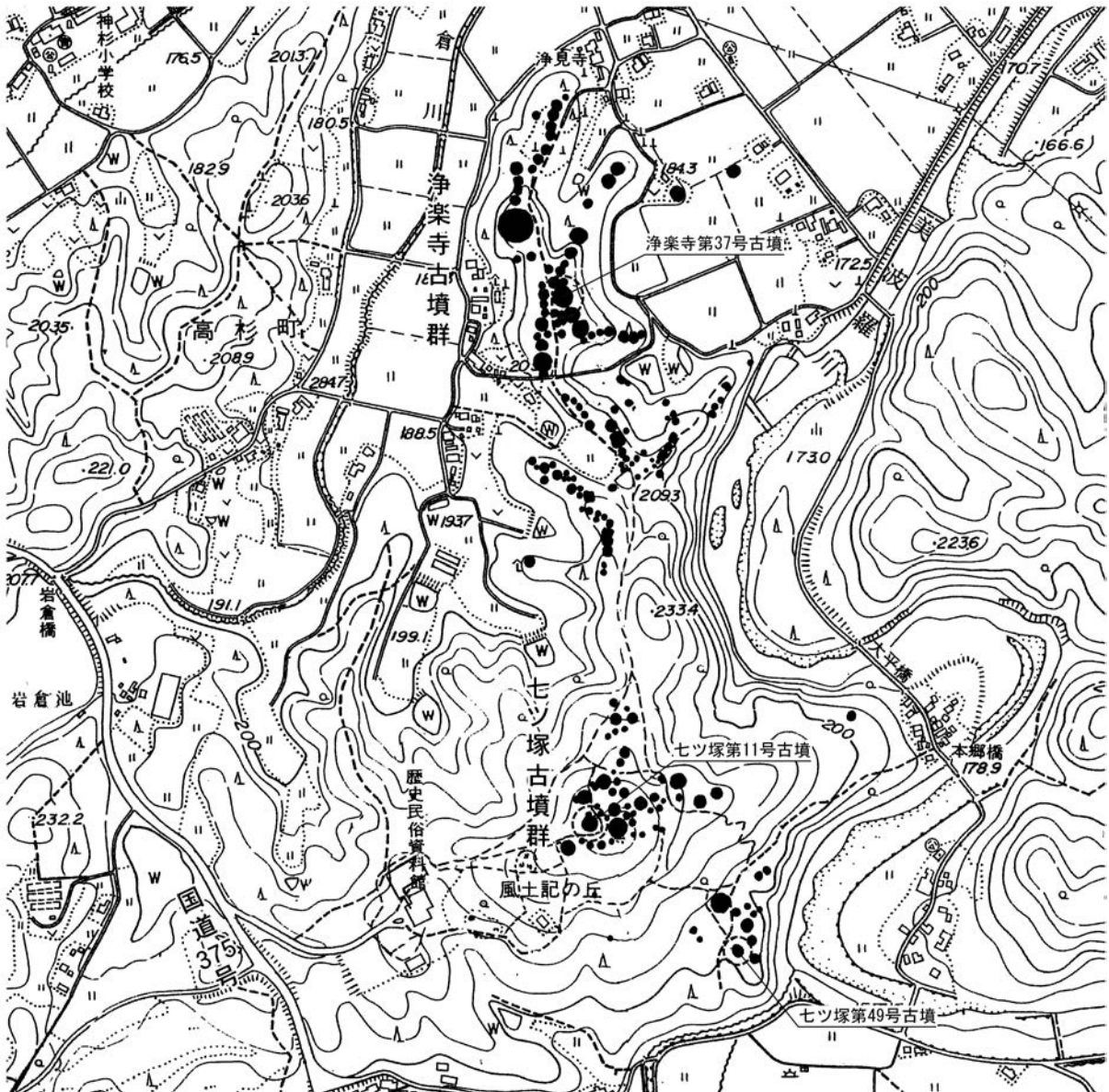
三次市浄楽寺・七ツ塚古墳群は三次盆地の各所にみられる初期群集墳の一つであり、当地域でも最大級の規模をもつ古墳群として国の史跡に指定されている(昭和 47 年 10 月指定)。浄楽寺第 1・12・37・61・63 号古墳⁽¹⁾の 5 基については、昭和 29 (1954) 年に広島県教育委員会と広島大学によって発掘調査が行われ、遺物や埋葬施設の内容がある程度判明している(松崎・潮見 1954)。しかし、これまでに計 176 基が確認されているうち、ほとんどの古墳はその築造時期を判断する材料に乏しかった。

広島県立歴史民俗資料館には、史跡指定や整備を経た後、古墳群の管理作業中や散策中に採集された資料が蓄積してきている。発掘調査未実施の古墳や、実施されたものの遺物が出土しなかった古墳の築造時期を知ることができる重要な資料群と言える。本稿ではその一部である浄楽寺第 37 号古墳および七ツ塚第 11・49 号古墳の採集資料をまずは紹介し、築造時期を中心に検討を行いたい⁽²⁾。

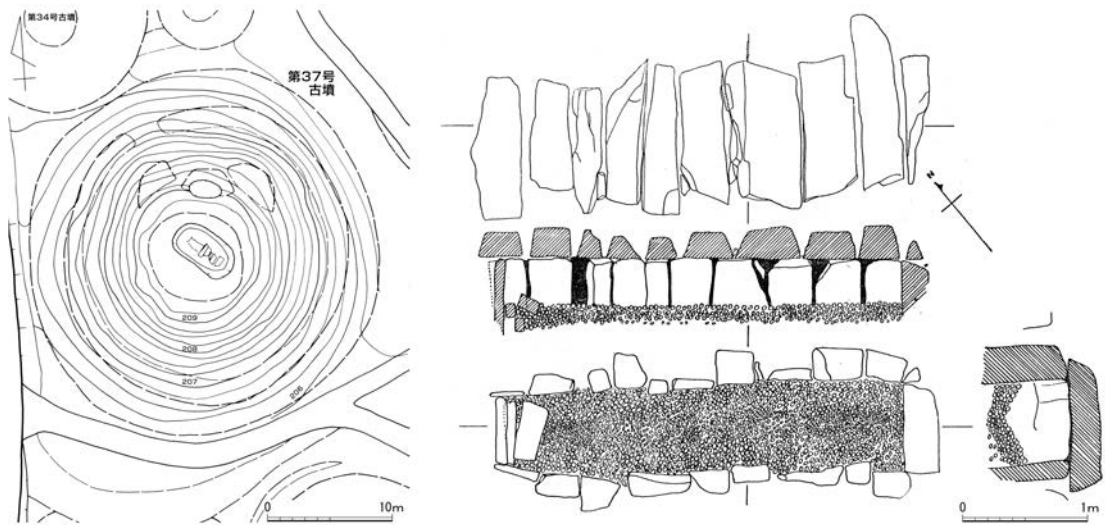
2 浄楽寺第 37 号古墳の採集資料

(1) 古墳の概要

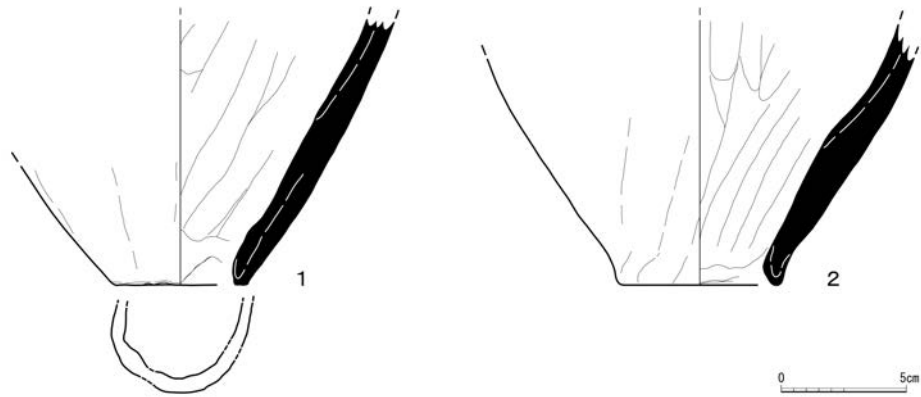
浄楽寺第 37 号古墳(旧 2 号墳)は墳丘の径約 29.5 m、高さ約 4.3 m の規模をもつ浄楽寺古墳群で 2 番目に大きな円墳である(植田 2003・2005, 第 2 図左)。発掘調査が行われた数少ない古墳の一つであり、墳頂部で床面に礫を敷いた大型の箱形石棺 1 基が検出されたが(松崎・潮見 1954, 第 2 図右)、埴輪や副葬品等の遺物は出土せず、築造時期が不明だった。本古墳では、これまでに壺形埴輪片・土師器片が採集されている。このうち、図化可能な壺形埴輪片 2 点について紹介する。



第1図 浄楽寺・七ツ塚古墳群の分布と資料採集古墳 (1/10,000)



第2図 浄楽寺第37号古墳測量図 (1/600) と箱形石棺実測図 (1/60)



第3図 浄楽寺第37号古墳採集埴輪 (1/3)

(2) 資料の紹介

1・2は壺形埴輪で、別個体である(第3図, 図版第1)。壺形埴輪1は東側段築面で採集された。胴部下半から底部にかけて残存する。底部付近は1/2周程度残存し、底径は5.3 cmである。胎土は密で、径1 mm程の石英・長石を含むほか、径0.3 mm程の角閃石をわずかに含んでいる。石英は表面がガラス化し、光沢がある。内外面ともに、にぶい黄橙色(10YR6/4)を呈し、内外が均等に焼けているが、断面芯部には黒色部分が残る。外面には丁寧なミガキが観察できる。工具の単位は不明瞭だが、硬質の原体を用いて縦方向に施されている。一定の幅ごとに稜がみられることから、製作者がこの幅の範囲を磨き終えた後に埴輪を持ち直し、隣の範囲を磨くという手順を繰り返したために稜が生まれたことが推定できる。外面のミガキは、粘土の乾燥がある程度進行した頃に施されたために工具単位が不明瞭になっていると考えられ、後述の内面とは調整に時間差が想定できる。内面は粗く撫で上げられ、外面と比べて雑な仕上がりで、粘土が大きく動き凹凸が著しく、器壁の厚さも一定しない。ナデの単位も明瞭で、粘土がさほど乾燥しないうちに調整されたと考えられる。下位では内面ナデの後に底面側から粘土が被さり、その後底面はヘラ状工具によってカットされ、撫でて仕上げられている。内面下端部には縦方向のシワがわずかにみえるため、内面撫で上げ調整の後、埴輪を倒立させて粘土を付加し、成形する際に底面付近を外側から両手で絞ったことが推定できる。底部が整美ではなく、いびつな円形であることは、絞り成形を行ったためと考えられる。断面観察から、粘土を内傾接合で積み上げて胴部下半が成形されたと考えられる。

以上の観察から壺形埴輪1の残存部位について製作手順を想定するならば、①粘土を積み上げ胴部を成形、②内面撫で上げ調整、③倒立させて底部下端に粘土を付加、④絞り成形、カットして撫でつけ、⑤半乾燥後に外面をミガキ調整、となる。

壺形埴輪2は埴裾(方角不明)で採集された。胴部下半から底部付近にかけて1/6周程度残存し、復元底径は6.2 cmである。胎土は密で、径1 mm程の石英・長石、径0.3 mm程の角閃石を含み、1と非常に似る。外面は浅黄橙色(10YR8/4)、内面はにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈し、断面芯部には灰色部分が残る。外面は風化が進むが、器面の鈎物が埋め込まれていることから、単位は不明だが縦方向のミガキ調整が行われたと考えられる。底部付近のみ明瞭な指頭圧痕が観察でき、圧痕の上方はミガキによって輪郭が消されている。内面は工具を用いて粗く撫で上げられ、器壁の凹凸が著しい。粘土がさほど乾燥しないうちに調整されたと考えられる。底面付近のみ、工具ナ

デの上に底面側から粘土が被さり、さらにナデが施されている。内面撫で上げ調整の後、埴輪を倒立させて粘土を付加し、ナデを施して成形したと考えられる。1とは違い、底部の断面形態は底面付近にくびれをもち、カットを行わないため底面に明瞭な面がなく、接地面のみが突き出す形態である。断面観察から、粘土を内傾接合で積み上げて胴部下半が成形されたと考えられる。

以上の観察から壺形埴輪2の残存部位について製作手順を想定するならば、①粘土帯を積み上げ胴部を成形、②内面撫で上げ調整、③倒立させて底部下端に粘土を付加、④撫でつけ、指頭圧、⑤半乾燥後に外面をミガキ調整、となる。

(3) 時期的位置づけ

広島県内で壺形埴輪が確認されている古墳は少ない。管見の限り、東広島市丸山神社第1号古墳(藤野 2015)、福山市尾ノ上古墳(福島 1999)、尾道市黒崎山古墳(増野・安川 2016)、本古墳の4例に過ぎない。これら県内資料の比較のみでは本古墳の壺形埴輪の時期を比定することは難しいため、地域は離れるが、壺形埴輪の出土事例が多い九州北部および四国北東部における研究も参考に検討を進めていく。

まず、広島県内の資料との比較を行う(第4図)。前方後円墳集成編年3期(近藤編 1991:以下、「集成〇期」と省略表記)に比定される尾ノ上古墳の壺形埴輪は胴部外面をハケ、内面をケズリによって調整されている。底部穿孔は焼成前・焼成後の両方が含まれるようである(福島 1999)。プロポーシオンは肩部が張った倒卵形であり、成形・調整方法や形態が浄楽寺第37号古墳のものとは大きく異なる。

続いて、丸山神社第1号古墳採集の壺形埴輪は、実見したところ底部を穿孔せずに最初から開放して成形していると考えられる。内面調整は一見するとケズリにみえるほどの粗いナデ上げを行っている。また、調整後に底部下端へ粘土を付加してから、底部を絞る個体がある(藤野 2015)。尾ノ上古墳と比べると、丸山神社第1号古墳と浄楽寺第37号古墳の壺形埴輪は成形・調整方法は類似している。一方で、丸山神社第1号古墳の壺形埴輪の底部から胴部にかけてのプロポーシオンは、浄楽寺第37号古墳に比べて若干丸みを失い、筒状を呈している。

以上により、上記三者の壺形埴輪の間には、多少の時期差が想定できる。さて、四国北東部では壺形埴輪の出土例が多く、形態や製作方法の変化を基に詳細な編年が組まれている(蔵本 2004、川部 2008、松本 2010)。集成3期までは体部は倒卵形を呈し底部は焼成前に穿孔するが、集成4期から長胴化し、集成4期後半には体部が筒状化し、底部は穿孔ではなく最初から開放して成形するようになることが指摘されている。続いて、九州北部の研究(村上 1988)によれば、集成3期までは体部は球形を呈し、内面調整はハケで底部は焼成前に穿孔するが、集成4期には長胴化が進み、内面はケズリ調整となる。そして集成4期後半から5期にかけて体部が筒状化し、内面は一見ケズリにみえる粗いナデが施されるようになる。このように、四国北東部と九州北部における壺形埴輪は形態や製作方法が同じような変化を遂げていることがわかる。

四国北東部と九州北部の状況を参考にすれば、形態や製作方法から広島県内の壺形埴輪は、尾ノ上古墳→浄楽寺第37号古墳→丸山神社第1号古墳という時期的変化が想定できる。丸山神社第1号古墳の壺形埴輪は口縁部形態によって集成4期から5期初頭と推定されているが(藤野 2015)、体部の形態や最初から開放して成形する底部、粗いナデによる内面調整といった点から、四国北東部の集成4期後半以降の事例(高松市中間西井坪2号墳)と特徴が近い。丸山神社第1

号古墳と浄楽寺第37号古墳の壺形埴輪は成形・調整方法は類似するが、体部の形態は丸みを残す浄楽寺第37号古墳のものがより古相を示す。また、浄楽寺第37号古墳の壺形埴輪は、全般的に集成3期の尾ノ上古墳よりは新しい様相を示している。したがって、浄楽寺第37号古墳の壺形埴輪の製作時期は、両者の間に収まる集成4期を考えることができ、古墳も近い時期に築造されたとみるべきだろう。

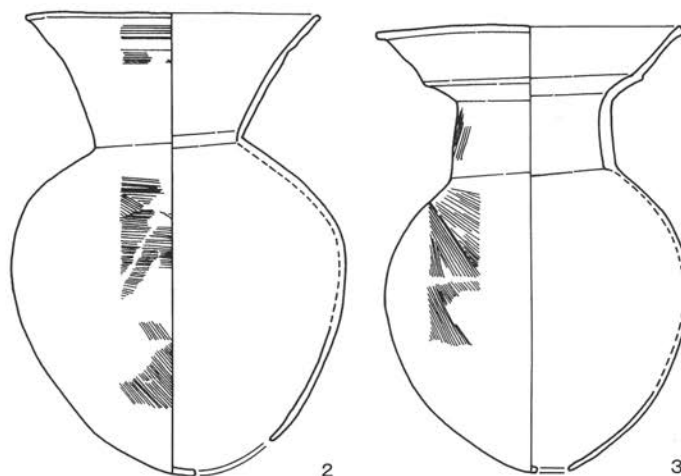
(4) 埴輪の配置状況について

浄楽寺第37号古墳の採集資料は本稿で紹介した壺形埴輪の底部片と、土師器片のみである。過去の発掘調査においても墳丘上から遺物が全く出土していないことから(松崎・潮見 1954)、本古墳に立てられた壺形埴輪の個数はもともと少なかったとみられる。同時期の四国北東部における状況も参考にすると、壺形埴輪の配置状況は数個体を墳丘上に樹立する「少量配置」に限られている(蔵本 2004, 川部 2008, 松本 2010)。これらのことから、本古墳の埴輪配置も壺形埴輪を数個体立てる程度の少量配置であったと考えられる。

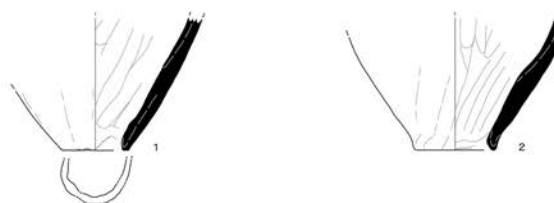
(5) 浄楽寺第12号古墳との比較

過去の調査成果も含めて考えると、古墳群内の大型円墳の間に明瞭な変化を見出すことができる。まず、浄楽寺第37号古墳(円墳:径29.5m)は礫敷きの箱形石棺を埋葬施設にもち(松崎・潮見 1954)、壺形埴輪のみ数個体を少量配置していた可能性が高い。一方、集成5期に築かれた

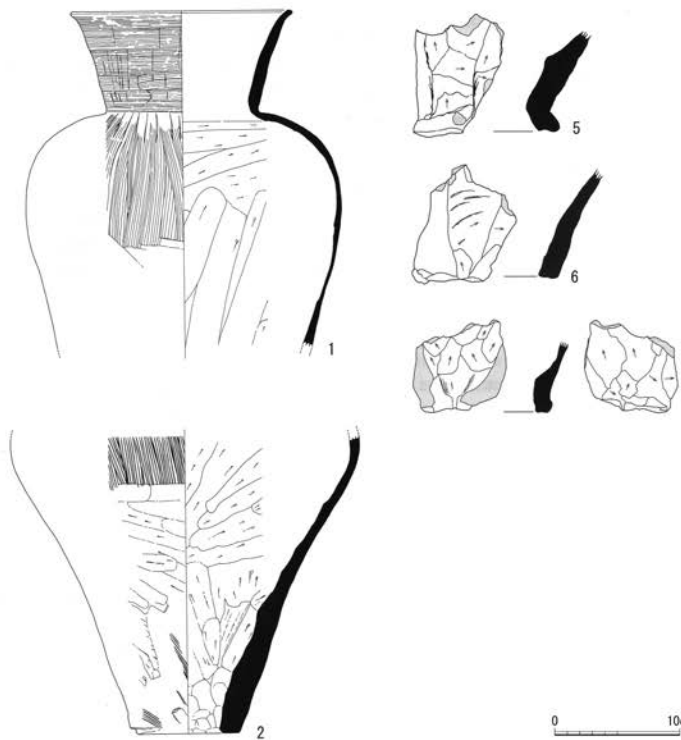
福山市 尾ノ上古墳



三次市 浄楽寺第37号古墳



東広島市 丸山神社第1号古墳



第4図 広島県内の壺形埴輪 (1/6)

と考えられる⁽³⁾古墳群内最大の第12号古墳(円墳:径45.8m)は粘土槨を埋葬施設にもち、墳頂と墳裾に円筒埴輪列を備え、墳頂からは家形埴輪も出土した(松崎・潮見1954)。このように、両古墳では埋葬施設や使用された埴輪の種類・配置が異なっている。

(6) 成果と課題

浄楽寺第37号古墳は過去に発掘調査が実施されたものの、調査の際に遺物が得られなかったために築造時期が不明だった。今回、採集された壺形埴輪の特徴を県内の事例と比較検討し、浄楽寺第37号古墳の築造時期を集成4期後半以前に比定することができた。古墳群で最大規模の同第12号古墳が最も古いとする想定もあったが(植田2003, 45頁)、遺物から推定できる築造時期としては、浄楽寺第37号古墳が現状では最も古いことになる。

成果が得られた一方で、疑問も残された。第一に、県内では壺形埴輪が配置された事例がきわめて少なく、壺形埴輪そのものが他地域からの影響のもとに製作された可能性が高い。浄楽寺第37号古墳の壺形埴輪についても、その系譜について検討の余地がある。第二に、集成4期の浄楽寺第37号古墳から、集成5期の同第12号古墳にかけて埋葬施設と埴輪祭祀の状況に変化がみられたが、その変化が生じている背景が何かということである。今後の課題としたい。

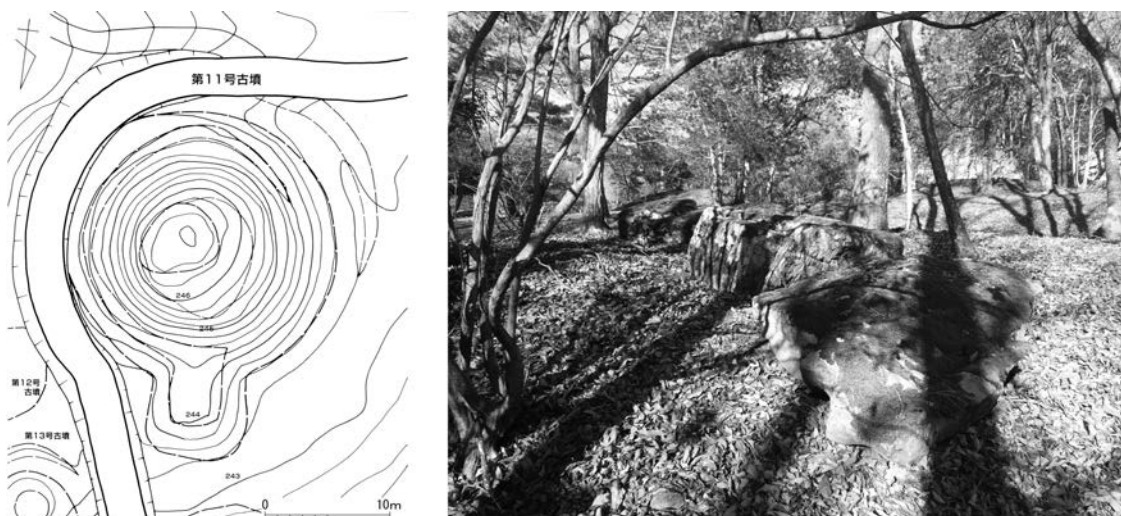
3 セツ塚第11・49号古墳の採集資料

(1) 古墳の概要

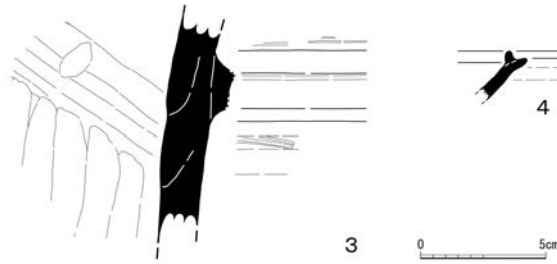
セツ塚第11号古墳は墳丘の長さ約28.5m、高さ約2.8mの帆立貝形古墳である(植田2003・2005, 第5図左)。また、同第49号古墳は墳丘の径約17.2m、高さ約1.5mの円墳であり、古墳群では数少ない横穴式石室墳として注目される(植田2003, 第5図右)。セツ塚古墳群では発掘調査された古墳がなく、倒木に伴い鉄銚が発見された同第46号古墳(青山2007)を除けば遺物の内容は不明だった。細片ではあるが、セツ塚第11号古墳では埴輪片が、同第49号古墳では須恵器片が採集されている。以下、遺物の特徴をもとに両古墳の築造時期を考えたい。

(2) 資料の紹介

3は円筒埴輪で、セツ塚第11号古墳の西側墳裾で採集された(第6図, 図版第2)。体部片で



第5図 セツ塚第11号古墳測量図(1/600)とセツ塚第49号古墳横穴式石室の天井石



第6図 七ツ塚第11・49号古墳採集資料 (1/3)

あり、突帯1条が残存している。剥落が著しいが、突帯は断面が突出の弱い台形状を呈し、幅約2.5cm、高さ1.2～1.4cm程である。突帯外面は横ナデにより若干凹んでおり、突帯上下面も横ナデが施されている。突帯以外も大部分が剥落しているが、横ナデの前に施された横ハケが一部に観察できる。内面は上位に斜め方向のナデが施され、下位はその後に強く撫で上げて調整されている。断面観察から、粘土の積み方は内傾接合によるものと推定できる。内外面は明黄褐色（内：10YR6/6、外：10YR7/6）、断面芯部は灰白色（5Y7/1）を呈する。非常に硬く焼けており須恵質に近く、窖窯焼成によるものと考えられる。胎土はやや粗く、径1～2mm程の石英・長石・黒色鉱物を多量に含む。

4は須恵器の杯身の口縁部片である（第6図、図版第2）。七ツ塚第49号古墳の天井石上で採集されたもので、盗掘などにより移動したものと考えられる。蓋受部は粘土貼付によって作りだされており、突出は微弱である。口縁端部周辺は回転ナデによって調整され、外面の一部が凹んでいる。内外面は灰色（N5/），断面芯部は暗赤褐色（5YR3/2）を呈する。胎土は緻密で、径1mm程の長石を含む。

（3）時期的位置づけ

七ツ塚第11号古墳採集の円筒埴輪3は、窖窯焼成による須恵質に近い焼成であった。須恵質埴輪は広島県内では備後北部地域で比較的多く見つかっており、5世紀後半から6世紀初頭頃には窖窯焼成による埴輪生産が開始されたことが想定されている（向田1985）。窖窯焼成の導入は円筒埴輪第IV群以降の特徴である（川西1978）。加えて、円筒埴輪3は突帯が突出の弱い低い台形状になっていることからみて、第IV群でも新相、あるいは部分的な横ハケを残す第V群の古相（島崎1992）に降る可能性もある。前方後円墳集成編年7～8期（近藤編1991）、古墳時代中期後半に位置付けられ、七ツ塚第11号古墳の築造も近い時期を想定できる。

七ツ塚第49号古墳採集の須恵器4については、細片のためプロポーシオンや口径、底部調整のあり方など不明な点が多いが、口縁部の形態からⅢ初期（陶邑TK217型式古段階）に相当する特徴をもつものと判断でき、7世紀の初頭を含まない前葉頃の年代観が想定できる（山田1998・2011）。七ツ塚第49号古墳の横穴式石室の初葬、追葬のどちらに伴うものかは不明であるため、築造時期とは言い切れないが、少なくとも7世紀前葉には古墳が造営されていたと考えることができよう。

4 おわりに

発掘調査の行われた古墳の少なさもあって、浄楽寺・七ツ塚古墳群の造営時期については「5世紀を中心とする」という程度の大まかな理解にとどまっており、個々の古墳に対する築造時期の検討はあまり行われてこなかった。今回、浄楽寺第37号古墳と七ツ塚第11・49号古墳の採集資料の特徴をもとに、これまで不明だった3古墳の築造時期を詳細に位置付けることができた。浄楽寺・七ツ塚古墳群で採集された資料は、本稿で紹介した以外の古墳についても存在する。今後も同様に研究・公開を行い、古墳群の歴史的意義の検討材料を増やしていきたい。

本稿で紹介したうち浄楽寺第37号古墳と七ツ塚第11号墳の資料に関する評価は、令和元年度博物館実習の課題として実習生が行ったミニ展示のための研究成果をその基にしている(第7図)。実習中の限られた期間で資料を研究して成果を挙げ、本稿における報告につなげてくれた実習生の下江裕貴・松原萌(ともに広島大学考古学研究室:実習当時)の両氏に深く感謝申し上げます⁽⁴⁾。

広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門教授の藤野次史氏には丸山神社第1号古墳採集の壺形埴輪の実見を許可していただくとともに、多くのご教示をいただきました。向田裕始氏には広島県内の須恵質埴輪について、また、第49号古墳の須恵器の時期について多くのご教示をいただきました。末筆ながら記して深謝いたします。



第7図 博物館実習の作業・展示風景

注

- (1) 昭和 29 (1954) 年の発掘調査段階では、現在の浄楽寺第 1 号古墳を「帆立貝式前方後円墳」、同第 12 号古墳を「1 号墳」、同第 37 号古墳を「2 号墳」、同第 61 号古墳を「3 号墳」、同第 63 号古墳を「4 号墳」とそれぞれ表記していたが(松崎・潮見 1954)、その後の分布調査に伴い古墳番号が現在のように振り直された。
- (2) 本稿は 2 (3) ~ (6) を下江が、その他を村田が分担執筆した。
- (3) 浄楽寺第 12 号古墳の出土埴輪、採集埴輪を検討し、その築造時期を集成 5 期と想定している。筆者らとの意見交換を基に永野智朗も同様の見解を示している(永野 2019)。
- (4) 博物館実習では浄楽寺第 12・37 号古墳、七ツ塚第 9・11 号古墳の採集資料を研究し、令和元(2019)年 8 月 2 日から 12 月 27 日まで、広島県立歴史民俗資料館エントランスホールにおけるミニ展示でその成果を公開した。埴輪を専門とし実習の中心となった下江氏は、関連文献調査によって浄楽寺第 37 号古墳の採集資料の器種が壺形埴輪であることを突き止め、時期的な位置づけまで行ってくれた。この努力が資料の適切な評価につながった経緯を鑑み、下江氏には筆頭として関連部分をご執筆いただくことになった。重ねて感謝申し上げます。

挿図・図版出典

第 1 図：植田 2003 に加筆。第 2 図：左：植田 2005 より一部改変。右：松崎・潮見 1954 より一部改変。第 3 図：村田作成。第 4 図：福島 1999・藤野 2015 より引用、村田作成。第 5 図：左：植田 2005 より一部改変。右：村田撮影。第 6 図：村田作成。第 7 図：村田撮影。図版第 1・2：村田撮影。

引用・参考文献

- 青山 透 2007 「七ツ塚第 46 号古墳出土の鉄鉾について」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第 6 集，広島県立歴史民俗資料館，42 ~ 44 頁。
- 植田千佳穂 2003 「史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群測量調査報告」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第 4 集，広島県立歴史民俗資料館，24 ~ 48 頁。
- 植田千佳穂 2005 「史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群測量調査報告Ⅱ」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第 5 集，広島県立歴史民俗資料館，17 ~ 36 頁。
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号，日本考古学会，1 ~ 70 頁。
- 川部浩司 2008 「四国北東部地域の壺形埴輪」『樞原考古学研究所論集』第十五，八木書店，121 ~ 142 頁。
- 蔵本晋司 2004 「丸亀市吉岡神社古墳の再検討—供献土器のありかたを中心として—」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』XI，香川県埋蔵文化財調査センター，49 ~ 108 頁。
- 近藤義郎編 1991 『前方後円墳集成』中国・四国編，山川出版社。
- 島崎 東 1992 「中・四国」『古墳Ⅲ 埴輪』古墳時代の研究第 9 巻，雄山閣，68 ~ 81 頁。
- 永野智朗 2019 「広島県」『中期古墳研究の現状と課題Ⅲ—埋葬施設の形式・構築方法・儀礼の地域的展開と被葬者像—』中国四国前方後円墳研究会第 22 回研究集会(広島大会)実行委員会，68 ~ 78 頁。
- 中村 浩 1981 『和泉陶器窯の研究』柏書房。
- 中村 浩 2001 『和泉陶器窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。
- 福島政文 1999 『尾ノ上古墳—真砂土採集場開発事業に伴う発掘調査報告書—』福山市教育委員会。
- 藤野次史 2015 「東広島市丸山神社古墳群の測量調査」『広島大学埋蔵文化財研究紀要』第 6 号，広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門，97 ~ 134 頁。

- 古瀬清秀 1992 「古墳時代における備後北部の特質—特に三次盆地を中心に—」『吉備の考古学的研究』(下), 山陽新聞社, 183～206頁。
- 増野晋次・安川 満 2016 「編年の基準となる前期古墳【広島県】」『前期古墳編年を再考するⅢ～地域の画期と社会変動～』, 中国四国前方後円墳研究会第19回研究集会(山口大会)実行委員会, 185～191頁。
- 松崎壽和・潮見 浩 1954 「広島県三次市神杉常楽寺古墳群調査概報」『広島大学文学部紀要』第6号, 広島大学, 158～172頁。
- 松本和彦 2010 「四国北東部の埴輪の様相—讃岐を中心に—」『円筒埴輪の導入とその画期』中国四国前方後円墳研究会第13回研究集会(松山大会)実行委員会, 39～60頁。
- 向田裕始 1985 「芸備地方における須恵器生産(1)—古墳時代を中心として—」『芸備古墳文化論考』芸備友の会, 131～163頁。
- 村上久和 1988 「壺形埴輪の変遷」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』(I), 大分県教育委員会, 115～118頁。
- 山田邦和 1998 「須恵器生産の変革」『須恵器生産の研究』学生社, 438～491頁。
- 山田邦和 2011 「須恵器の編年 ①西日本」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学1, 同成社, 146～159頁。

(しもえ ひろき 広島大学大学院文学研究科博士課程前期・むらた すずむ 当館学芸員)



浄楽寺第37号古墳 壺形埴輪



壺形埴輪 1 外面ミガキと底面カット



壺形埴輪 1 内面ナデ・絞り目と底部付加粘土



壺形埴輪 2 内面ナデ



壺形埴輪 2 底部断面



七ツ塚第11・49号古墳 円筒埴輪・須恵器



円筒埴輪3 外面横ハケ(1)



円筒埴輪3 外面横ハケ(2)



円筒埴輪3 内面ナデ



須恵器4 口縁部断面